



絵本と共に育つ子どもたち

— 小中学生への授業・読み聞かせを通して —

小林 徹

はじめに

私はこれまで、自分の絵本好きも手伝って、中学校特別支援学級の授業の中で、子どもたちに多くの絵本を読み聞かせてきました。「中学生に絵本？」なんて感じる方もいらっしゃるでしょうね。でも、障害の有無にかかわらずなく、絵本が好きな中学生は多いのです。今回は、私の大好きな絵本を紹介しながら、絵本と子どもたちがどのように出会ってきたかを伝えたいと思います。

中学生にふさわしい絵本とは

障害のある子どもたちにとって、読書には高いハードルがあります。漢字が難しく、量が多い。語句の意味がわからない。文章が長い、等々。

その点、絵本は平易な文字や語句が使われ、文章も短く、さらに理解を助ける挿絵まであるので、特別支援学級の読み取り教材として適しています。

しかし、どんな絵本でも構わない、という訳ではありません。文字の読み取りや理解に、障害があったと

しても、生活年齢は立派な思春期の若者です。幼い内容の絵本には、拒否反応を示します。これは障害ゆえに、日常的に周囲の人々から子ども扱いされてしまうことに対する、嫌悪感の表れかもしれません。

そこで、私は次のような分類を意識しながら絵本選びをしています。

①若者らしい葛藤を扱った絵本

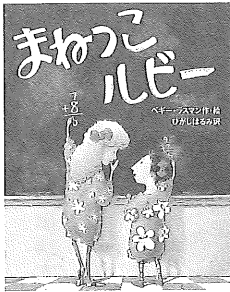
『まねっころびー』の主人公ルビーは転校してきた小学生。前の席のアンジェラと仲良くなった途端、彼女のままねっこを始めます。それがルビーの不器用な愛情

まねっころびー

P・ラスマン作・絵

ひがしはるみ訳

徳間書店 一九九七年



表現なのですが、服、しぐさ、発言とまねっこがエスカレートする中で、とうとうアンジェラに嫌われてしまいます。子どもたちは、時にルビーの立場になり、あるいはアンジェラの立場になって迷い悩みます。常に人間関係で傷ついてきた自分たちと、重なる部分が多いのだと思います。ハッピーエンドを迎えたとき、安堵の吐息が聞こえたように感じました。

『いいたくない』（かさいまり作・絵 ひさかたチャイルド 一九九八年）では仲良しのクマとウサギがケンカをします。あまりの寂しさから、クマはウサギを探しますが、見つけた相手はキツネと談笑していますが、相手も寂しい気持ちでいてほしいと思っていたクマは、深く傷つきます。こんな場面は教室の中でよく見かける光景です。子どもたちは、深く悲しむクマと自分とを重ね合わせて、作品を味わっているようでした。

このように、子どもたちの心の揺れを描いている作

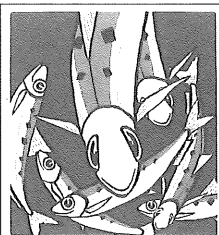
品は、思春期を迎えた生徒たちに、共感をもって受け入れられます。ほかにも『ともだちや』（内田麟太郎 降矢なな絵 偕成社 二〇〇六年）、『にんきものひけつ』（森絵都文 武田美穂絵 童心社一九九八年）などは好評です。

② 生命や自然への畏敬を扱った絵本

『いわしくん』では、主人公のいわしくんがいきなり漁船の網にかかり、魚屋で売られて、食べられてしまいます。しかし、この後、物語は意外な展開を見せます。いわしくんを食べた子どもが翌日学校に行くと、体育の授業はプールでした。元気に泳ぐ子どもの姿に重なるように、いわしくんの満足そうな表情が描かれます。「ぼくはおよいだ」というセリフは、実際に泳いでいる子どものものでありながら、その血となり肉となったいわしくんの、命と意志を受け継いだことを表しています。

いわしくん

菅原たくや作
文化出版局 一九九三年



いわしくん
菅原たくや

この絵本を読み聞かせると、生徒たちはいわしくんの哀れな境遇を笑いますが、最後は決まって途方に暮れた表情を見せます。二回読んで、一緒に結末を考えて、やっと次の答えにたどりつくのです。私が伝えたのは、「他の命を消費するのではなく、継承するのだ」という考え方です。「食べた命が、自分の体の中で生きている」という発想が大切なのだと思います。

近年、愛する者の死や、自然と人間のかかわりを描くことで、生命について考えさせてくれる絵本が、多く出版されています。『おじいちゃんがおばけになつたわけ』（K・F・オーカソン文 E・エリクソン絵

あすなろ書房 二〇〇五年）、『さよならエルマおばあさん』（大塚敦子写真・文 小学館 二〇〇〇年）、『おばあちゃんは木になった』（大西暢夫写真・文 ポプラ社 二〇〇二年）、などは、とても重いテーマをわかりやすく、子どもたちに伝えてくれます。

③ 人を好きになることを扱った絵本

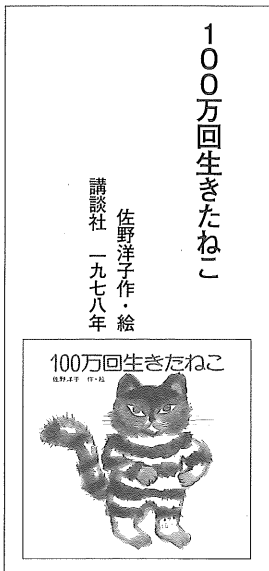
『しろいうさぎとくろいうさぎ』は、いつも当たり前のように一緒に過ごしてきた二匹のうさぎが、改めて互いの存在を再認識し結婚するまでを、ほのぼのと描いています。このうさぎたちの表情の愛らしさは、子



どもたちの気持ちを、しっかりとつかまえます。五十年前の作品なのに、古さを感じさせない物語です。

『一〇〇万回生きたねこ』も、三十年前の絵本です。自分のことだけが大好きで、何回死んでも生き返ってしまうねこが主人公。やがて、一匹の白いねこ出会うことで、主人公の運命は大きく変化します。死ねなかつたことの意味が大きな伏線になっています。難しい物語ですが、時間をかけて生徒たちとじっくり読み込んだ作品です。

障害のある生徒たちの多くは、人間関係で苦しんだ経験を持っています。中には幼少期から虐待的な環境



で過ごしてきた子どももいます。彼らには、人を好きになることの素晴らしさや、その気持ちを表現し、その感情を相手と共有する楽しさを、ぜひ、伝えたいと思うのです。このほかにも、『あらしのよるに』（きむらゆういち著 あべ弘士絵 講談社 二〇〇五年）や『となりのせきのますだくん』（武田美穂作・絵 ポプラ社 一九九一年）などのシリーズが子どもたちには人気です。

④ おもしろおかしく笑える絵本

私は以前、自分の子どもの通う小学校で、保護者として読み聞かせボランティアをしていました。毎年続けていくと、子どもたちから読んでほしい絵本のリクエストが届くようになり、その中で、毎年第一位を守り続けた絵本が、『アボカド・ベイビー』です。ハーグレイブさん一家に、待望の赤ちゃんが生まれますが、食が細いのです。困り切った家族が、なぜかテ-



ブルにあったアボカドを与えたとこころ、食べる食べる。赤ちゃんは、見る見る丈夫になります。それどころか、ピアノや自動車を動かしたり、泥棒を撃退したりと、信じられない大活躍を始めるのです。赤ちゃん版「ボパイ」といったこの絵本は、子どもたちから絶大な人気を得ました。

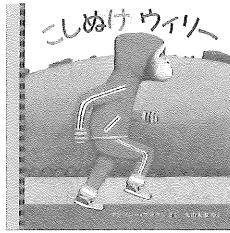
『こしぬけウィリー』も大人気の絵本です。ひ弱でいじめられっ子のゴリラのウィリーが、一冊の本との出会いから、自らを鍛え、マッチョなゴリラに変身するという物語です。弱い者が強くなって成功する点や、面白おかしい出来事が次々に起きて笑わずにいられない

い点で『アボカド・ベイビー』と共通点があります。私は、こういった文句なく笑える絵本というのも、

大切だと思っています。子どもたちを最初に絵本の世界に導くときや、深く考える絵本を読んで疲れた後には、とても有効ですし、リクエスト第一位でもわかるように、次に読むときの楽しみにもなります。同様の絵本では『ぶたのたね』（佐々木マキ作・絵 絵本館 一九八九年）、『レーザーこうせんじゅうビービー』（いとうひろし作 童心社 一九九八年）、『3びきのかわいいオオカミ』（E・トリビザス文 H・オクセンバリー絵 富山房二〇〇四年）などがあります。

こしぬけウイリー

A・ブラウン作
評論社 二〇〇〇年



絵本と共に育つ

子どもたちにとって絵本とは何でしょう。授業で使う以上、教材であることには間違いありません。子どもたちは、文字や語句の意味、文章の仕組みや物語の内容など、多くのことを学びます。でも、絵本は単なる「教える材料」ではないように思うのです。

私は、自分が大切な友人を子どもたちに紹介するよくなつもありで、読み聞かせているのではないかと思っています。友人である絵本の素晴らしさももちろんですが、その友人を愛している私の気持ちも、丸ごと伝えようとしているのです。やがて、私の友人は子どもたちの友人となり、そして、彼らからまた次の人たちに紹介されていくかもしれません。

そんな夢を膨らませながら、これからも子どもたちと一緒に絵本を読んできたいと思います。

(羽村市立羽村第三中学校)